

3. 自治研セッション

1%の仕事から考える。 課題が価値に変わるとき

第40回
地方自治研究全国集会

しまね 自治研

じちろう……2024年7月15日より

1日目「自治研セッション」に登場



働き方研究者・西村佳哲さん

「しまね自治研」1日目の目玉企画「自治研セッション」に登場する「働き方研究者」の西村さん。聞いたことのない肩書だ。一体何者か？

スタートはデザイナー。30歳で大手企業を辞めて独立したとき、さまざまな「いい仕事」をしている人に話を聞きまわったことから生まれた名乗りだ。徳島県の神山町では地域創生に関与。執筆、中小企業の伴走支援、様々なワークショップの主催など、幅広く活動する。

《働く》ことを軸に自治を見つめる自治研集会上、西村さんはどんな新しい風を吹き込むのか(2面にインタビュー)。

じち35……2024年7月15日 [毎月1日・15日発行・1954年4月17日第三種郵便物認可] 第2371号(2)



西村佳哲さん (取材日: 6月26日)

自治体職員が働き方を変えれば地域が変わる

自分の言葉で話す会議を 役場はまちのバックオフィス

※1面から続く

多くの人の《働き方》を見つめてきた西村さん。彼の眼には、自治体職員の仕事ぶりは、どのように写っているのだろうか。

徳島県の神山町と東京の二拠点生活をしながら、役場の仕事ぶりを見て感じたのは、職員数が少なく、職員1人ひとりが自分の仕事で手いっぱい、周囲と話し合っていない、経験が少なく、という点だ。既存業務を問題なくこなすだけでは新しい仕事は生まれません。ですが、どんな組織にも新しいことを始める人はいるものです。住民がそういふ職員を応援して、役場にフィードバックができる、いいと思います。

やめ方を教わり、慣れる新しいことを始めるためには、時代に合わない古い仕事をやめる必要があります。ところが、やめるのは難しい。クリエイティブにやめたことを、上手にやめた

組織から学び、やめることに慣れないといけません。また、仕事は会議で進みますので、会議のあり方はとても重要です。会議では自分の言葉で話すことが大切で、「誰かがこう言っていた」ではなく、「自分はこう思います」と、自分の意見を言わないと、会議は死にます。

会議には、共有・拡散・混沌・収束の4段階があります。ところが、拡散と混沌を恐れて、すぐ収束してしまう会議が多いです。拡散・混沌を経た結論豊かなものになります。これを2〜3回経験すれば皆できるようになります。

役場はまちのバックオフィスです。企画総務部門が明るく、いろいろな組織は元気になる。役場の雰囲気作りも楽しみにしています。

ですので、とても大事です。自治研集会上、参加者の皆さんがヨコの交流ができる貴重な場だと思っています。

第40回自治研集会上島根

1日目 10月4日(金) 全体集会 10:00~17:00
(会場: <にびきメッセ>)

自治研セッション 13:00~16:00
「1%の仕事から考える。課題が価値に変わるとき」

◎登壇者 西村佳哲さん (働き方研究者)
藤井誠一郎さん (立教大学教授)
前田 真さん (自治労東大阪)

2日目 10月5日(土) 分科会 9:00~16:00
(会場: <にびきメッセ他>)

第1分科会 [定員制: 先着80人]
ようこそ島根へー自治研入門リターンズ 会場「ホテル白鳥」

第2分科会 地方を変える、AIの力

第3分科会 公務職場を魅力あるものにするために

第4分科会 もう知らないでは済まされない
LGBTQ+【実践編】

第5分科会 いのちを守る防災・減災計画
難産7-その時あなたは

第6分科会 地域公共交通の現状と課題
交通弱者をつくらないまちづくり

第7分科会 中山間地の地域づくり
会場 浜田市「石中央文化ホール」

特別分科会 [定員制: 先着60人] (開催県本部主催)
世界遺産の町で学ぶ歴史と暮らし
会場 大田市「石見銀山世界遺産センター」

特別分科会 地域から考えるカーボンニュートラル

職業差別を乗り越えた先進的な屎尿収集

立教大学 コミュニティ福祉学部
准教授 藤井誠一郎

先日次のような光景に出くわした。登校途中の中学生の集団の横を清掃車が通った時、そのうちの1人が迷惑そうな口調で「清掃車、臭いな」と大きな声をあげて言った。

確かに臭った。しかし、社会に必要な仕事に従事している人に向かって大きな声で言う言葉ではない。しかも清掃車自体が臭いのではない。排出するごみが臭いのである。

その集団は清掃車を馬鹿にしながら過ぎ去っていったが、関わりを持ちたくなかったので注意しなかった。しかし暫くして、注意しなかった自分を後悔した。この中学生は筆者の所属する大学の付属中学生であったので、なおさら後悔した。

ごみ収集以外の臭いが伴う業務といえば屎尿収集があげられる。現在では水洗トイレが普及しているため、都市部ではバキュームカーをそれほど見ない。しかし何らかの理由で下水道が整備できない地区や工事現場の仮設トイレには屎尿収集が必要であり、バキュームカーが活躍している。そしてその業務に従事している方々がいる。

筆者は屎尿収集業務に携わる公益財団法人東大阪市公園管理協会の前田真さん(36)と偶然知り合い、東大阪市での屎尿収集を見学させて頂いた。本稿では、屎尿収集業務の実態と、そこに携わる方々が職業差別を受けながらも自らの仕事の価値を高めて乗り越えようとしている状況を述べてみたい。

東大阪市での屎尿収集にあたる東大阪市公園環境協会

東大阪市は大阪平野の東端にあり、「中小企業のまち」「ラグビーのまち」として知られている。都市化された地域であるが、生駒山には岩盤が硬く下水道が敷設できない地区が存在する。その地区の世帯や、借家の大家が下水道への接続を見合わせている世帯が、約1300存在する。

これらの世帯や工事現場等の仮設トイレの屎尿収集を担っているのが、2012年に東大阪市が100%出資した外郭団体の公益財団法人東大阪市公園環境協会（以下、協会）である。7台のバキュームカーを駆使して、約1300世帯の屎尿を月2回収集している。

公園環境協会の外観



出典：筆者撮影

事業所にはバキュームカーが並ぶ



出典：筆者撮影

尿尿収集作業の実際

尿尿収集は汚れが伴う作業である。その汚れというのは尿尿によるものもあるが、むしろ家屋の裏までホースを伸ばしていく際につく土や泥によるものである。もし尿尿が付着してしまった場合は直ぐに事業所に戻って着替える。

ホースを家屋の裏側まで持って行く様子



出典：筆者撮影

ホースの位置を決める様子



出典：筆者撮影

実際のところ過酷なのは臭いではなく、夏場に発生する蜂である。家屋の裏側での収集作業となるため蜂に襲われることもある。あしながバチやスズメバチに刺されてしまう作業員もいる。

作業は3人体制で行われる。これは詰まった汚物が吸い込まれだす際にホースが暴れる（「走る」）ことがあるため、人にあたってり周辺の器物を損壊させたりしないように、足で踏みつけてしっかりと固定する必要があるからである。3人は多いと思うかもしれないが、安全作業で細やかな配慮を施しながら収集するためには必要な人員となる。

ホースを固定しながら吸引していく



出典：筆者撮影

ホースを固定する際にユニフォームが汚れる。



出典：筆者撮影

ホースは柔らかいイメージがあるが、実際は重くて硬く思うようにホースを取り扱えない。手元が狂うとホースに残る汚物が飛び散り、周囲を汚してしまったり自らも汚れたりする。慎重に便槽の蓋がある箇所まで伸ばしていき、吸引作業へと移っていく。

収集業務は便槽にホースを入れるだけに見えるかもしれないが、細やかにホースをコントロールする技術が必要となる。便槽の中にホースを入れ、尿尿の表層と同じ高さにキープする。吸引力が強いため結構腕力が必要な作業となる。かなり速く吸引されるため表層の位置が下が

っていく。それに合わせて高さをキープして収集を進めていく。

吸引が弱くなったと感じた際には、空気のみを入れて汚物をタンクの中に吸い込ませる。その際には「ゴロゴロゴロゴロ」という音が響いてくる。タンクの中に汚物が入ると「スー—」という音に変わる。これを「息継ぎ」と言い、再度汚物の表層にホースを近づけて吸引作業を続ける。

収集作業にあたる前田さん



出典：筆者撮影

巧みなホースコントロールで収集していく



出典：筆者撮影

便槽には尿尿やトイレットペーパーがあるが、生理用品や冬場はカイロが入っていることもある。カイロは吸い込めないため汲取対象者に処理を依頼するが、対応が難しい場合は別途収集することもある。

固形物が大きくホースに吸い込まれない時がある。ホースの口の角度を変えて吸い込ませる際には一気に流れ込むため、ホースが暴れる現象が起こる。吸引者が「走るよー」という声をかけ、残りの2人はしっかりとホースを固定し、器物の損壊を防ぐ。3人のチームワークにより収集作業が続けられていく。

綺麗に尿尿を取ることを心掛け、借りた水を便槽に流し込み、固形物が残らないように綺麗に吸い取る。留守中に収集する際には収集した旨を伝えている。たくさんの細やかな配慮を施しながら作業を行っている。

バキュームカーのタンクがいっぱいになると尿尿等下水道放流施設に向かい、そこに降ろして再度現場へと向かっていく。

尿尿等下水道放流施設に到着



出典：筆者撮影

尿尿は前処理・希釈され下水道に放流する



出典：筆者撮影

作業中に味わった屈辱

バキュームカーには脱臭機を装備しているが、作業では臭気を伴うため子どもに限らず大人からも「臭い」と言われたり鼻を摘ままれたりする屈辱的な経験を前田さんは重ねてきた。その一つを紹介してみたい。

収集作業中に近所の中学生の一団が街の美化活動の一環でごみ拾いをしながら近づいてきた。ホースが暴れてぶつからないように道の端に寄せて足で踏んで押さえ「ご迷惑をおかけしております」と言った。しかし、生徒のうちの一人がわざとらしく大声で「くっさ！！きも！！」と言い、それに続くように幾人もの生徒が「くさいなあ。きもいなあ」と笑みを浮かべて吐き捨てて去っていった。

この暴言は、その列が通り過ぎるまで吐かれ続けたという。その中学生の列の前後には教員がついていたが、謝罪はなされず、作業員の方々を見ることもなく、そそくさと去っていった。生徒の暴言や教員の態度に前田さんをはじめとする作業チームのメンバーには激しい怒りがこみ上げたが、「相手にせんとこ」と言って、怒りをぐっところえて鎮めた。

帰宅途中で市役所の壁に吊るされた垂れ幕をたまたま見た。そこには「みんなで差別をなくそう」と書いてあった。それを見た瞬間、自然と涙が溢れだし、嗚咽が暫く止まらなかった。

負の連鎖を断ち切り新たな屎尿収集へ

屎尿収集に関する暴言に対しては、悪臭を不快に思う相手の立場を理解し、自らの心の中に収め前を向き業務に勤しむ者もいれば、職場での暴力にはけ口を求めたり、汲取対象者に「汲み取りをしてやってる」と高圧的な態度等をとったりする者もかつてはいた。

このような業務態度で汲取対象者や市民と接していると、さらなる差別が助長されていくようになり、負のスパイラルに陥る。前田さんを中心に協会の皆さんは、このような負の歴史を断ち切り、誇りを持って仕事をしていけるよう、職場における仕事の進め方を変え、次世代の汲取業務にしていくための2つの改革を掲げて実践していった。

第1に、親切・丁寧・迅速・確実な収集の徹底を心掛けるようにした。汲取対象者のみならず地域の方々との信用・信頼関係を構築し、作業中に影響を及ぼす方々への事前の声掛けを積極的に行う等のきめ細かな配慮を施す収集形態にしていった。

第2に、災害時における収集処理行動計画や事業所のBCP（業務継続計画）を策定し、災害時のトイレ対策のスペシャリストになるようにした。災害時で水洗トイレが使えなくなる時のために携帯トイレを備蓄し、その使用方法を市民に周知徹底していく啓発事業等を行い、災害時でも排泄行為が誰でも安心してできるように準備していった。

職場全員でBCPへの認識を深めている様子



出典：筆者撮影

備蓄された携帯トイレ等



出典：筆者撮影

この2つの改革は、これまでいわゆる単純労務とされた汲取業務を進化させ、社会の誰もから必要とされる業務へと昇華させていく先進的な取り組みである。この取り組みが全国的に波及していけば、尿尿収集に携わる方々が、私たちの日常の排泄を守ってくれる人たちであるという認識が浸透していき、これまでの職業差別が一掃されていくのではないと思われる。

これからの可能性を追求する尿尿収集へ

これまで職業差別の視点から尿尿収集業務について述べてきたので、前田さんをはじめとする協会の皆さんは、浴びせられる数々の言葉に逐次敏感に反応している様子をイメージさせてしまったかもしれない。

実際はそうではない。協会の皆さんは職業差別を超越した次元で仕事を極めようとしている。職場での研修を通じてコンプライアンス遵守を徹底し、自らの使命「地域の公衆衛生を守る、まちをきれいに守る」を確認し合い、その目標に全てのパワーを集中させるように歩んでいる。どんな罵声を浴びせられようが、それに反応するパワーまでも目標へのエネルギーへと変換させ、地域の公衆衛生を守る方法とは何か、平時・災害時を問わずまちをきれいに守るためにできることは何かを議論し合い、実践でそれを追求している。そのうちの1つが「トイレの専門家になる」である。

協会の取り組みはこれからの尿尿収集をリードしていく形だと思える。このノウハウが他の地方自治体や団体にも波及していき、これからの尿尿収集を進化させていってほしい。この流れの先には、「尿尿収集者は社会の宝だ」と認識される社会が展望される。

実践にて収集業務に磨きをかける前田さん



出典：筆者撮影

* 本稿の引用・転載はお控えいただきますようお願いいたします



クイズを取り入れ講義を進めた

災害時のトイレ対策

一次避難場所に働く じちろうの仲間と学ぶ

自治労東大阪市労働組合
自治体関連評議会公園環境協会分会

前田真さん

自治労東大阪市労働組合の執行委員を務める前田真(まえだまこと)さんは2024年8月2日、川口オートレース場(埼玉県川口市)で働く埼玉県競走労働組合の自治労組合員にむけて「災害時におけるトイレ対策 ～だれでも使いやすいトイレ環境づくり～」と題して講演した。

前田さんは普段、(公財)東大阪市公園環境協会に勤め、し尿収集業務を行う。また、トイレのプロとしての研さんを積み、一般企業や学校などで啓発活動をしている。

川口オートレース場は同市内に15カ所ある指定緊急一次避難場所の一つだ。一時的な避難が想定される場所ではあるが、トイレも必要となることは言うまでもない。

前田さんは「大規模な地震が発生した際、電気、水、トイレなどの公共インフラは止まる可能性がある。電気・配管・処理施設・送水



施設・トイレなどが損傷すれば水洗トイレやくみ取りトイレの使用が困難になります」と話す。「発災後、あなたの身近にあるトイレは使えなくなります。そのときあなたはどうしますか」と約30人の参加者に投げかけた。

講義のほか、参加者は簡易トイレの使い方を体験。汚物の代わりとなる試料を注ぎ、凝固剤を入れる。一体どのようになるのか、と皆興味津々な表情だった。

講演の最後には率直な質問が多数あがり、埼玉県競走労働組合の仲間たちは災害時のトイレ対応を学び、日常生活から職場での対応を考えるきっかけとなったに違いない。



簡易トイレの設置から、汚物の処理までを体験

前田真さんは、10月4日に行われる「しまね自治研」全体集会の「1%の仕事から考える。課題が価値に変わるとき」と題したセッションに登壇します。公民評の仲間でもある前田真さんを応援しに、島根に行こう！

参加者申し込み受付中